

研究主題：「多様な学びを生かした新しい学習活動の創造」～聞き合い、伝え合い、深く考える児童を目指して～

「聞き合い、伝え合い、深く考える」ための基盤となる言語能力とは

— 国語科の説明的な文章指導を中核にして —

共栄大学教育学部 光野公司郎

*国語科は科学である。系統性と発展性がなければならない。ひとつひとつの教材はつながっている必要がある。

1 国語科教育の目的 = 母語である日本語を「よりよく使える力」を育成すること

そのための二つの方法 ①「教えなければ身につかないもの」を教える。

②「自然に身に着いたもの」を学びなおす。

2 「自然に身に着いたもの」= (日本語を使って) 思考し、表現すること

バットを持たせれば誰でもスイングはできる。しかし、球に当たらない。ヒットは打てない。

3 (自分の言いたいことについて) 「思考し、表現する」方法は二つのみ

① 物語的に「思考し、表現する」

② 論理的に「思考し、表現する」 ←それを「学びなおす」ために教科書に物語と説明文がある。

4 二つの思考に個性はない(明確な型がある) = 「基本的な型」が螺旋的に向上していく

言語活動の方法が積みあがってくるのではない。

5 国語科教科書の教材は「算数セットのおはじき」と同じもの

「おはじき」の色や模様(教科書教材の内容)にとらわれすぎていないか。

色や模様は見ればわかる(教材を読めばわかるということ)。

その「おはじき」を使って何を教えるのかを系統的に見通しているのか。

6 よく見られる「聞き合い、伝え合い」

・理科や社会の観察・実験後：「グループで話し合ってみよう」

→ 単なるおしゃべり

↑「させる」ことで言語能力が身につくという思い違い

7 何のために「聞き合い、伝え合い」を行うのか

<目的 = 各教科・領域の指導内容を「深く」理解させるため>

今までの授業：混沌としている＝わかったつもりになっている

(教えられた片々の知識・技能は覚えてはいるが整理されていない状態である)

「確かな学力」育成のために

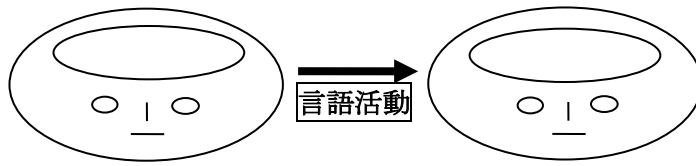
これからの授業：秩序を持って整理されている＝本当にわかった

(それぞれの関連性がわかり全体としての知識・技能が習得される)



	西 暦	事 柄
	5 9 2	推古天皇即位
飛	5 9 3	聖徳太子摂政
鳥	6 0 7	遣隋使派遣
時	6 3 0	遣唐使派遣
代	6 4 5	大化の改新
	7 0 8	和同開珎流通
奈	7 1 0	奈良に遷都
良	7 2 4	聖武天皇即位
時	7 5 2	東大寺大仏完成
代	7 5 3	鑑真来日

*整理し秩序立てるため（本当にわかるため＝深く考える）の手段が「聞き合い、伝え合い」である



年表に書かれていない重要な事柄をひとつあげ、あなたがなぜそれを重要だと思ったか理由を示して説明しなさい。

例えば「説明」という言語活動とは、「説明」することによって、その授業内容（単元の指導内容）を本当にわからせる（確かな学力）にまで高める＝習得させる）ものでなければならない。

- 8 「聞き合い、伝え合い」とは論理的（カテゴリー的）思考構造に則って行われる
 説明的な文章の読解→△ 豊かな教養（あくまでも指導の結果。決して目的にはならない）
 →○ 論理を読む能力の育成（これを自分の「話す」「書く」に生かす）

「思いを表現する」ための言語活動

<小学校における「説明的な文章の構造と内容の把握」に関する指導事項>

第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
ア 時間的な順序や事柄の順序などを考えながら、内容の大体を捉えること。	ア 段落相互の <u>関係</u> に着目しながら、 <u>考えとそれを支える理由や事例との関係</u> などについて、叙述を基に捉えること。	ア <u>事実と感想、意見などとの関係</u> を叙述を基に押さえ、 <u>文章全体の構成</u> を捉えて要旨を把握すること。

「順序」「段落相互の関係」「構成」の捉え方を、(◎教科書㊦教える)

論理的な構造（論理的な思考の枠組み）が「構成」である。

*論理的な思考に個性はない。以下のような「思考の枠組み」が世界共通の基盤である

『ぼくのお父さん』（義務教育段階のすべての教育活動を支える「思考の枠組み」の典型）

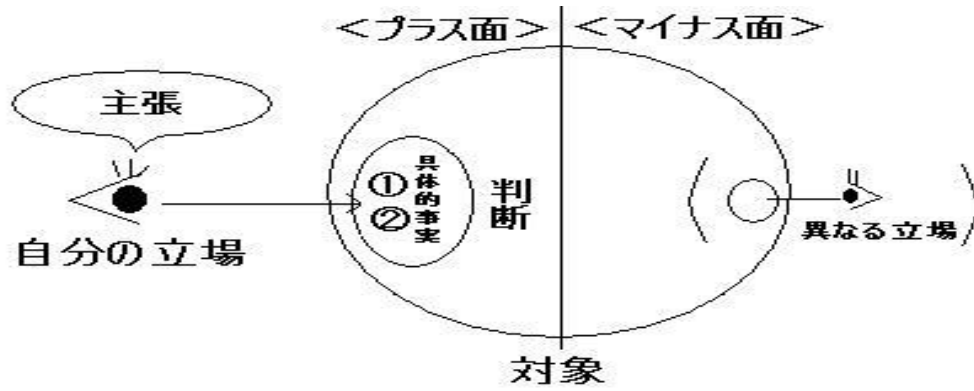
はじめ ぼくのお父さんは、トラックの運転手です。

なか① きのうは、遠くまで出かけたので帰ってきたのは夜おそくでした。

② きょうは、にもつのつみこみがあるので朝早く出かけました。

おわり { まとめ まいにちまいにち、とてもよくはたります。

{ むすび ぼくも大きくなったら、お父さんのようによくはたらく人になりたいです。



<小学校学習指導要領との関連>

四構成	はじめ	なか	まとめ	むすび
各要素の要約	トラックのうんてん手	①夜おそくまではたら く ②朝早くからはたら	お父さんはよくはたら	ぼくはお父さんによ う になりたい
構成	← A → ← D →			
順序	← B →			
段落相互の関係	← C1 → ← C2 → ← C3 →			

「事実」と「感想」と「意見」の
論理的結びつき（考えるべき対象について
論理的かつ説得力あるように結びつける）

A…始めから終わりまで話に一貫性があること
B…「なか」の**具体的事実の配列法**。*低学年で重点的に教えること
時間的・空間的・論理的（六種類）順序がある。この場合は時間的順序となる。
C1…「なか」の要素内の関係性（列挙・対象などがある）*低学年
C2…「なか」「まとめ」の要素間の関係性（帰納的）。*中学年
C3…「まとめ」「むすび」の要素間の関係性（演繹的）。*高学年
*C23…「なか」「まとめ」を一つとしてとらえると「むすび」との関係性は
「事実と意見」となる
D…四要素の配列の工夫。「むすび」を始めに持つてくると頭括型となる等 *高学年

9 どのように能力が向上するのか（前述4：「基本的な型」が螺旋的に向上していく）
小学校においては10段階で向上する ← これを各学年の説明的な文章で教える

10 説明的な文章の教材研究のポイント

説明的な文章は「問いと答え」などでできてはいない。

<表現面> *文字レベル・音声レベル・言葉以外の工夫 ← 見えてくる・聞こえてくる工夫

<構造面> *思考段階の工夫 ← 頭の中の段階（レイアウトの段階も含める）*これが10段階ある

11 10までの考えを基盤とした本校の研究

研究はシンプルでわかりやすく、しかも簡単に（児童にも教員にも）

<各教室に「国語コーナー」の設置・基本文『ぼくのお父さん』の掲示>

<国語科の学びを基盤とした他教科等への発展の方向性>

12 本日の研究授業を振り返って

・1年生『じどうしゃくらべ』

・3年生『すがたをかえる大豆』

・5年生『グラフや表を用いて書こう』（『固有種が教えてくれること』）

13 本校の研究を生かした各校の実践に向けて

1) 学習指導要領で強調された各教科等の「見方・考え方」とは何か。

「お茶のペットボトルを売り出そう」

<国語的な「見方・考え方」> <図工的> <家庭科的> <保健体育的> <etc.>

「はじめ」 このお茶のペットボトルを売れるようにするにはどうしたらよいでしょうか。

- 「なか」 ①
②

「まとめ」

*このお茶のペットボトルは魅力的だ。買う価値がある。

「むすび」 このお茶のペットボトルを買おう。

2) 各教科等における教科特有の「見方・考え方」を生かした言語活動の実践

例：4年生音楽「旋律のよさを感じ取ろう」－主活動「鑑賞文」を書く

『白鳥の鑑賞文』

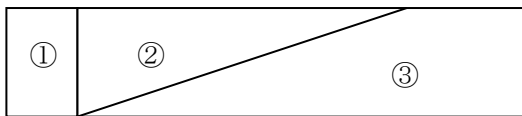
- | | | |
|-----|-----------------------|------------------|
| な か | ① 特徴・よさ(曲想と変化＝指導事項ア) | ↓ *大きなこと(低学年の順序) |
| な か | ② 特徴・よさ(要素の関わり＝指導事項イ) | ↓ *小さなこと(低学年の順序) |
| まとめ | 想像したことや感じ取ったこと＝指導事項ウ | |

↓

音楽科で育成すべき「見方・考え方」が十分にはぐくまれている。それにより『何ができるか』も感じ取ったであろう。(2015・11 湘南白百合学園小学校における実践)

3) 国語科を中核としたカリキュラムマネジメントの実施(例：社会科との教科横断的授業)

<教科横断的な授業の流れ>



- ① 第一次：横断的授業の全体の見通し
- ② 第二次：国語科授業(教科書教材を用いて)
- ③ 第三次：社会科授業(国語科の学びの活用)

・3年生 単元「スーパーマーケットの工夫について発表会をしよう」 *言語活動 = 発表会

(2014・10 春日部市立備後小学校における実践)

- ① 第一次：社会科見学(スーパーマーケット)の想起。単元目標の確認。
- ② 第二次：『すがたをかえる大豆』の「思考の枠組み」を用いて発表会をすることの理解。

「はじめ」 いろいろな食品にすがたをかえている *「まとめ」の先取り = 双括型構造

- 「なか」 ① 豆撒きの豆・煮豆(そのままの形)
② きなこ(粉に挽く) *③④省略
⑤ 枝豆・もやし(育て方の工夫)

「まとめ」 いろいろな食品にすがたをかえている

↓ <順序>
既知
↓
未知

*順序性については「既知→未知」以外にも「単純→複雑」「一般→特殊」等が考えられるが、単元の目標(社会科の目標実現)のために最も効果的なものを活用させていくことが大切である。

- ③ 第三次：発表会にむけての発表原稿の作成。「まとめ」ごとにグループ化（「このように安く売るためにいろいろな工夫をしています」等）。取材してきたことを「既知→未知」の観点で再構成。第一次発表及び評価会。本発表に向けての再取材（社会科の授業において）。

*児童たちは社会科で地域のスーパーへ見学に行った。そこで様々なことを観察し説明を聞いてきたことになる。ここにおいては児童の頭の中は混沌とした状態（知識が整理できていない状態）であると言える。これらの知識を整理するための「言語活動」が「発表会」である（「発表会」は上手に見栄えよく発表することが目的なのではない）。その整理するための「思考の枠組み」が教材の構成である。まず「まとめ」をグループで限定させ発表会の目的を明確にした。そして、「まとめ」の根拠となる具体的事実を「なか」として抽出させた。さらに、「なか」を「既知→未知」で配列させて第一次発表を行わせた。すると、他のグループからの評価等により、「私たちの班は見学前から知っていること（皆が知っているようなこと）ばかりだった」等と気付くことになる。そうになると、必然的に児童は「再度スーパーに取材を申し込む」などの「未知」のものを追究するために新たな行動を起こすことになる。思考を整理し意味づけることによって新たな気付きが生まれ社会科という教科の目標を深く達成していくための契機となったのである。

14 おわりに

*本日お話したことはインターネット上に公開している「NOTE」が基になっています。御笑覧いただければ幸いです
<https://note.com/tnrqw> (バイアスがかかってしまうので所属や氏名を伏せていますことを了承下さい)

